

2021. 1. 30

No.222

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間2,000円)



## 寒中お見舞い申し上げます

コロナ、コロナで明け暮れた2020年でしたが、年が明けてからも収束する兆しは見えません。感染症に弱い家族がいるため、殆どの集会には出ることが出来ませんでした。たまに映画を観ますが余韻に浸る間もなく、わき目も振らずに帰ってきます。

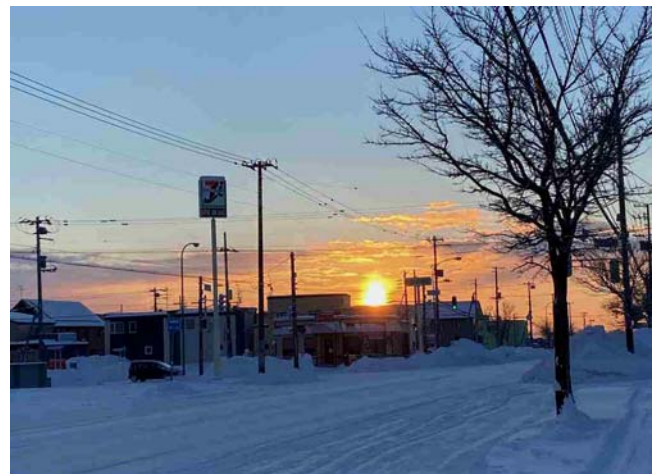
今年こそは行きたいところに行ける自由や、友人や老いた母に会う自由を取り戻せたらと思います。今年も、拙い通信ですがご愛読お願いします。

札幌や江別は、この年末年始44年ぶりの大寒波です。私の住むところでは連日、氷点下10度を下回る日々が続きました。その上、雪が多く、一人での雪かきは応えませんでした。厳しい寒さでも、身近な自然に励まされました。写真で北海道を味わっていただけたらと思います。



晴れた日は、近くの大きな木にたくさんの雀が集まり賑やかにさえずっています。今日也会えるかなと小さな楽しみになっています。友人や仲間に会いたくても叶わない今、楽しく語らえる日が待ち遠しいです。

さまざまな活動を停止していて紙面に何を載せるか悩みました。2～4ページは読者からのご寄稿と新聞掲載記事から引用しました。ドイツの環境ジャーナリストの今泉みね子さんと台湾の登山歴70年のレジェンド、張玉龍さんの文章と、数年前にアウシュヴィッツ博物館でグループガイドをしていただいた中谷剛さん(その後読者に)の活動が朝日新聞で記事になりましたので抜粋して紹介します。



1月12日 氷点下10度の早朝。朝焼けがきれいだったので、スマホを持って追いかけました。近所の人たちもまだ活動していない時間で、まだ車の往来が少なく、早起きの効用ですね。



雪かきから一日が始まる日々が続きました。疲れをいやすには、自然に触れるのが一番です。そんな朝、近くの公園に散歩に行くと、さすがに雪が深く公園の中に入るのは難しいと思いました。でもぐるりと回ると、近隣の人たちが、雪を捨ててのに小さな道をつけていました。その高台に上がったら、素敵な光景が広がっていました。



# クリスマス前から都市封鎖 ドイツの新型コロナ感染対策の現状

今泉みね子（フライブルク在住・環境ジャーナリスト）



閑散とした街並み

ロックダウン対策を取りました。飲食店やホテル(出張者だけは泊まれる、観光客は禁止)、劇場や博物館や映画館などが閉められた一方で、一般の店舗は開かれ学校や職場も通常通りでした。

けれどもこの対策はほとんど功を奏しませんでした。それで政府は12月中旬に、これらの対策に加えてさらに厳しい措置を打ち出しました。これによって、食

品を売る店と薬局以外の店舗は全て営業が停止されています。デパートも本屋もブティックも靴屋もいまだに閉まっています。銀行と医者「営業」しています。レストランやカフェはテイクアウトのみが許されていますが、多



閉店を知らせる貼り紙

くの飲食店は全く営業をしていません。サッカーやスキーなどの試合は観客なしで行われ、コンサートなどが集まる催し物は全てご法度です。学校はまずは冬休みが延長され、その後も2月中旬まではインターネットを介してなどのホームスクーリング(自宅学習)がされ学校での授業は行われません。企業にはテレワークが推奨されているものの、義務付けられてはいないので、春の頃に比べると少ないと批判されています。

プライベートでの出会いは、家の中だけでなく、公共の場所(つまり道路とか森)でも、1世帯の人同士プラス他世帯に住む人一人だけ、とされています。同じ世帯で暮らしていない人は、一人を除いては連れ立って歩いたり、集まったりはしてはならない、ということです。14歳以下の子供は例外だそうです(パッチワークファミリーが多いので)。それでも、日中に屋外に散歩やサイクリングに出るのは許されています。

州によっては、夜間の外出が基本的に禁止され感染者密度の高い地域では、家から15キロメートル以上の移動も禁止されています。

現在は公共交通機関内と停留所、店舗内では、FF

P2マスクか不織布のメディカルマスクの着用が義務付けられています。

12月には60歳以上の人は、薬局でFFP 2マスク(KN 95、N95とも、他人だけでなく着用者もエアロゾルに含まれるウイルスから守るとされる)を3個、無料で受け取ることができました。

これだけの対策をしても、感染者は大幅には減っていません。1月中旬には24時間以内のコロナ死者数が1200人以上となった日もあります。累計死者数は1月17日現在、4万6000人余り。24時間以内の新感染者数が2万人を超える日もあり、累計感染者数は2百万人を超えました。ですから病院のベッドや集中治療装置のキャパシティは限界に近づいていると言われます。ベッドそのものよりも医師や看護師への負担がもう限界を超えているのです。このため、治療しても助かる見込みの薄い患者(介護ホームの高齢者など)は病院には入れてもらえない場合もあると言われます。

頼みの綱とされるワクチンは、注文に遅れをとりアメリカやイギリスのように十分な量が入手されていないので、予防接種はなかなか進みません。接種はまず医師や看護師や介護士ならびに80歳以上の人に実施され、その後も年齢や基礎疾患の有無に従って行われます。私の番が来るのはいつになるのか。あらゆる対策の結果、飲食店やホテル、ブティックなどの破産、これらの従業員やアーティストなどフリーの人の失業など、深刻な経済問題も起こっています。国からの援助や補助金などが出るとしても、それだけでは足りないと言われています。学校が通常の授業でなくホームスクーリングに切り替えることから、様々な困難が起こっています。小学生の子供が家にいるために、親が働きに出られない、親に子供の学習を手伝うだけの学力がない、家庭に十分なコンピュータがない、さらにはインターネット授業をするための装置が学校に備わっていない、などなど。私の娘は彼女の夫と交代でホームオフィスと出勤を交互にしていますが、子供のホームスクーリングを手伝いながら自らの仕事も自宅するのはかなり難しいようです。

それでも、市民の大半は政府の対策を支持しています。ただし、危機感春の第一波の時ほどはないように感じられます。コロナ疲れと言えるでしょうか。

さらには、「コロナなど存在しない」などと主張して、マスク着用義務などの対策に正面から反対する人もいます。これらの人々の中にはネオナチや極右の団体が混じっています。

現在恐れられているのは、イギリスや南アフリカに広がっている変異ウイルスです。すでにドイツでも発見されましたが、この感染力の高いウイルスに現在のワクチンが効くのかどうか、ワクチンの改良が間に合うのかどうか。それが明確でない今は感染を止めることだけが唯一の対策なのです。

# 私の登山人生

張 玉龍（台北市・台湾陽明山国家公園榮譽解説員・中華健行登山会常務理事）

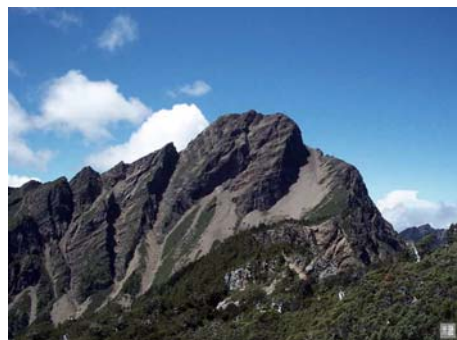


私は子供の頃から父に連れられて、休日は山、川、海と遊び回っていました。そして高校は水泳、野球、ラグビー、柔道等で体を鍛えて登山が好きになり、救

2021, 1. 23 : 2, 100mの雪山観霧ビジターセンターで

国青年登山会に参加。そして専門学校時代から登山の先輩、おもに林務局員、電力会社輸配電技師などの人たちが職務上、高山地区勤務に行く時に同行して、3,000m級の登山を始めました。それから徴兵制度により山地教育(岩登りも含む)を受けて特殊部隊員になり、益々登山技術と知識が豊富になりました。

社会に出てからは休暇を利用してたくさんの山に登りました。台湾の5大山脈にある3,000m以上のピークは220以上あります。台湾の百名山は最高海拔の玉山(日本名称、新高山)3,952mの高さから順番に低い99個のピークを選んで台湾100名山としています。台湾高山のピークは植生が頂上まで生えているので展望の悪いのが大部分です。私は展望の良い山を選んで約半数の名山に登りました。



玉山(新高山) 3,952m

び、美しい自然を楽しんで登るべきと思っています。その登山中に発見した事柄を記録し整理すればとても貴重な山の資料になると思いました。

それで私は3,000m級の山を一個選んで、その山を100回完登して、登山記録を完備した登山者には、NT\$50,000(新台幣ドル、約18万円)の奨励金を差し上げる事を20年前に公表しました。私の“山を100回完登する主旨は”100回の同じルートには100回異なった自然環境(植物、気象等)があるはず。その異なった状況の観察等を学術的に統計分析すれば山の自然学問になると思います。同一山100回登頂記録は良い登山教育の資料として寄与できる事と信じています。

山の学生達及び登山界に“1山 x 100回”を呼びかけていますが現実の所、若い人達は生計を立てるのに精いっぱい、金にならない山の記録等には興味がなく、今だに私が提供する奨励金を申入る人はいません。職業ガイド業者には玉山を100~300回以上登っている人は多勢いますが、職責は登山客の安全

その登山中に体験した感想は山登りは単純に頂上を往復するだけでは青春浪費だと思います。また山は競走する所では無く、色々な大自然の傑作を観察、学



台湾山桜が咲きました

を主にしていますので、私の要求する内容に該当する人はいません。私自身は戦後・国民政府が台湾にきて、山地開放になった後で高所登山を始めて以来、玉山は62回登っています。ところが数年前から左膝関節に痛みを覚え、先年夏に左膝の人工関節手術をしました。現在歩行は順応していますが”1山×100回”は断念する事にしました。近年、身体の老衰を自覚し、常務理事に就任していますが、登山会の第一線を離れます。今年は私の米寿にあたり、諸事情に鑑み、完全に引退する事に決めました。

張玉龍さんはチョモランマ遠征隊での隊長などを歴任。海外の山に多数登っています。台湾でお目にかかりました。とても気さくで心優しい方です。(み)

## ホロコーストの地 戦争知らぬ日本人「語り部」担い20年

アウシュビッツ公式ガイド 中谷剛さん  
(朝日新聞2020年9月19日付け記事から)

写真は2014年7月にアウシュビッツ博物館に行ったときに私が撮影した写真です。記事を抜粋して紹介します。



ポーランド南部にあるアウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所跡にただ一人の日本人ガイドがいる。中谷剛さん(54)。戦争を知らない世代の、それも日本人が、ナチスドイツによるホロコーストの歴史を伝える――。20年以上続

けるうちに、中谷さんが考えるに至った「部外者の役割」とは。

「コロナ禍の今、水を得た魚のように排他的になる人がいる。一方ですごく良心的な人もいる。スペイン風邪の流行から大戦に至る歴史の中にもあった状況です。この力関係で、大事なのは大多数の傍観者がどう振る舞うか。歴史から何かを考え、少なからず行動する人を育てていくのはアウシュビッツの役割でもあると思います」

――自分が日本人である意味を、どう考えてきましたか。

「アウシュビッツには、多くのドイツ人も訪れる。私自身、ナチスドイツと同盟を結んだ国の人間です。それも相まって、加害者側からどう見えるのかを理解したくなり、日本軍が中国人捕虜への人体実験をした旧満州(中国東北部)・ハルビンの『731部



隊』の展示施設を訪れました。周囲の視線が気になり、こんなむごいことを……と、みじめな気持ちになっていた時、売店の若い女性店員が『ありがとうございました』と日本語で話しかけてくれた。その一言に、救われる思いがしました」

「市民団体の主催で長崎や広島の被爆者らと船でシンガポールまで行った時は、被爆者がまず加害者の日本人としてみられ、『原爆が落とされたから戦争が終わったのでは？』と問われて悩んでいる姿を目の当たりにしました」

「アウシュビッツも、ユダヤ人が被害者で、ドイツ人が加害者という単純な構造で理解することはできない。中間地点にはたくさんの傍観者がいたし、ユダヤ人も虐殺を手伝わされた人もいた。当事者であればあるほど、自分が加害者なのか、被害者なのか分からなくなるのが戦争なんだ、と。証言に向き合い、なぜ起こったかを考える上で、私はこの視点が重要なのだと思うようになりました」

——どうしてですか。

「互いの正当性を主張することを乗り越え、どうしたら繰り返さないかを考えることにつながるからです。生還者で元館長の故カジミエシュ・スモレンさんは、ドイツ人の来訪者にも『あなたたちに戦争の責任はない。でも、なぜ起きてしまったのかを考え、二度と繰り返さないように行動する責任はある』と言っていた。そういうことなのだ、と思います」

——「淡々と伝える」ようにしているといます。なぜですか。

「スモレンさんが、そうだったんです。理由を尋ねると『涙を流すより、悲劇を繰り返さないように自ら考え行動してほしいから』と。笑いや冗談も交えて話す。自分たちは筆舌に尽くしがたい経験をした。それを伝えなければならぬ。でも受け取る方は苦しいだろうと。やさしさです。生還者に共通するのですが、底知れぬ人の心のありように魅せられました」

「生還者は、人間の最も野蛮な部分を見続け、極限状態に長くいたので、人間の本性が見えすぎてしまう。苦しいでしょう。それでも、人はすばらしい面も持ち合わせていると信じている。自分や身近な人の喜怒哀楽を大切にしていくことで、野蛮なところ、闇の部分がたくさん出てしまうのを防ごうと考える。人間というものへの諦めがあった上で、光の部分を求めているのだと思います」

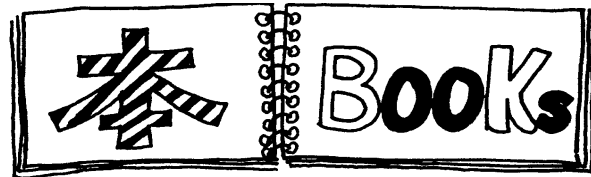
——「アウシュビッツはなかった」といった歴史修正主義は欧州でも、日本でも強まっています。

「『間違っている。改めなさい』と否定しにかかる、感情のぶつけ合いになってしまう。なぜ相手がそんなことを言い出したのかという真意を探ろうとすれば、歩み寄っていけるところもある」

「差別は、競争心の裏返しであって人間の本性です。歴史から学び、闇の部分を広げすぎないようにブレーキをかけるしかない。歴史は個人や国家がそれぞれ考え選択し、行動した結果の集合。選択を迫られる中で、歴史を知っていれば、自分や社会の立ち位置が分かり、引き返す手助けになる」(聞き手・小島弘之、平賀拓史)

取材を受けた中谷さんはこんなエピソードを教えてくださいました。「アウシュビッツを見学したことがある水戸総局次長の女性記者が、戦後75年を迎えて若手記者や大学生が私と懇親会という企画をして、茨城・栃木の地方版に掲載されたのが評判がよく、全国版になりました。

この記事を書いた人は京都大学でドイツ近代史を学んだそうで、掲載された日に大学の恩師から連絡があって褒められたそうです」「ポーランドもコロナ禍で大変で、アウシュビッツ博物館は休館中ですが、私はZOOMなどを使って、日本の高校や大学で歴史を伝えています」とメールを頂きました。



## 都市封鎖を助け合いで乗り切った

### 武漢日記

方方  
封鎖下60日の魂の記録

### 武漢日記

封鎖下60日の魂の記録

方方著 飯塚容＋渡辺新一  
(訳) 河出書房新社 17, 60円

武漢が封鎖の日から1年。テレビや新聞でにぎわいを戻した街の様子を伝えています。その一方で政府の「人から人への感染はない」と言い続けたことで「家族は命を失った」と激しく怒りをぶつける人々の姿に胸が締め付けられました。

世界最初の新型コロナウイルスの感染爆発が起こった武漢。武漢に住む小説家である著者は1000万都市が封鎖されてから、解除が発表されるまでの60日間を克明に綴りました。

不自由な生活の中で、頼りにしたのは家族、同僚、友人(高校や大学の同級生)たちでした。彼らと情報交換をウィーチャット(日本ではラインに相当する)で行ったのです。ほとんどのことはスマホのアプリで行われた。中国のSNSやインターネットの普及には目を見張りました。

中国政府は「人から人への感染はない」と嘘の情報を流し続けました。多くの市民が亡くなり「私は言っておきたい。ある国の文明度を測る唯一の基準は、高いビルや軍隊ではない。弱者に対して国がどういう態度を取るかだ」と書きます。武漢人がこの間、どのように過ごし、どのようなことを感じ考えていたのかが、率直に綴られています。

胸を打つのは武漢に住む人々が協力し合って苦難を乗り越えたことでした。困窮する武漢には中国全土から新鮮な食材が送り届けられる。外出が制限されて買物が難しければ、共同購入グループが作られ、代表が買い物に行き、分配が難しければ時差やボランティアによる配布でなんとかする姿がありました。昔ながらの互助精神の健在さに、日本も見習わなくてはと思いました。

武漢で体験した記録は、今、まさに日本が直面している問題です。方方さんは、政治の責任を問う報道や、悲惨な現実を伝える報道が少ないことに怒ります。感染初期の対応が遅れたことや、声を上げた医師を処分し、事実を隠ぺいしたことへの責任を一貫して追及しています。国のリーダーは国民の命を守る責務があります。菅総理に同じ言葉を返したいです。



## 希少な花と旅のエピソードが満載

うめしゅんの 世界花探訪

梅沢俊著 北海道新聞 2,420円

写真家として50年近いキャリアを持つ梅沢俊さん。道内を中心に高山植物などの写真を撮り続けてきました。1990年代からは海外にも頻繁に足を運び、ネパールや中国などヒマラヤで希少なケシ科メコノプシス属「青いケシ」の撮影に成功しました。27年前に初めて出会った思い出や、6年前にブータンで倒れ、現地で手術した道中のアクシデントも記しました。60種以上の花の写真と旅のエピソードをで紹介しています。礼文島のカラフトアツモリソウなど、国内の希少な花も取り上げています。

梅沢さんが身近になったのは1997年の夕張岳の高山植物盗掘事件でした。全道各地の山を愛する自然保護団体、山岳会などが結集して北海道高山植物盗掘防止ネットワークを設立しました。当時から梅沢さんは積極的に参加され、講演会では山の植物と撮影のエピソードを語っていただきました。私も高山植物保護ネットと改称する前の最後の5年間事務局長を務めました。梅沢さんは会立ちあげの頃から「銀河通信」の長い読者です。本書の美しい花の写真に心洗われます。

でももっといいのは、どんな大変なときもユーモアを忘れない精神です。文章に引き込まれます。意外だったのは鉄道が好きで、鉄道でしか行けない秘境駅にも足を延ばしていることです。オオユリワサビの可憐な美しさに是非私もどこかで出会いたいと思いました。

健脚でいつも若々しい梅沢さんがブータンの山中で意識不明になりました。お連れ合いの節子さんの機転で人力と救急車でティンブーの病院に運ばれ手術し一命を取り留めたのです。この話は3年前の講演会で直接聴き、驚きました。そんな体験も本書には書かれています。私の連れの体験とも重なり、涙が出ました。

コロナ禍で遠出ができず、巣ごもりしている方が多いと思います。花旅をしたような気持ちになれますよ。



## 訴訟記録から読み解いた

民衆暴力  
一揆・暴動・虐殺の日本近代

藤野裕子著 中公新書 902円

本書は、新政反対一揆、秩父事件、日比谷焼き打ち事件、関東大震災時の朝鮮人虐殺を中心に取り上げ、日本近代の民衆暴力を描き出します。明治初期から大正にかけて起きた4つの事件から、暴力をふるう側の論理と心情に迫ります。

岡山県の美作(みまさか)地方で1873年(明治6年)に起きた新政反対一揆では処罰記録に含まれる供述書の内容を紹介します。放火や被差別部落襲撃の罪で2万7千人もの処罰者が出た一揆として知られます。首謀者だった村の顔役は、白衣を着た者が血を取りに来るとの噂(うわさ)を事前に流していた。その後、白衣を着せた者を村に送り込み全村を恐慌状態に陥れた上で、被差別部落の襲撃に及んだ。新政府の賤民(せんみん)呼称廃止方針によって、旧来の村秩序が乱れることへの怒りが根本にあったという。

著者は「歴史をとらえて暴力を見つめ、思考を鍛えることが必要だ」と書いています。著者を突き動かしたのは、歴史修正主義者が行政にまで入り込んでいる事への危機感でした。

従来の研究は、国家への異議申立て、民権運動の発露、大災害時に噴出した排外意識といったように、事件の目的や特殊性からの分類を試みています。自らの願望や要求の発露のために民衆がふるう暴力、その一点で4つの事象を繋いだところがいままでの研究にはなかったことでした。

秩父事件は、農民裁判文書に収録された当事者の調書から、日比谷焼き打ち事件は訴訟記録の警察官の報告書を役立てました。関東大震災の時に起きた、自警団による朝鮮人虐殺の動機は、警察によるデマが大きな原因になったことが、訴訟記録に残されていました。「軍隊に殺されるくらいだから悪いことをしたに違いない」とデマを信じ込み、自ら虐殺に手を染めたという。コロナ禍で「自粛警察」が息苦しさを増しています。それにながることが朝鮮人大虐殺の時代にあったことに驚きを禁じえませんでした。

安倍政権では公文書の改ざん、破棄が平気で行われました。過去の歴史文書はきちんと保存しなければ、負の歴史を学ぶ場がなくなってしまいます。

民衆暴力から今日に通じる教訓が得られるのではないのでしょうか？



## 少数派であることを怖れず 発言してきた人たちの言葉

時代の抵抗者たち

青木理著 河出書房新社  
1,870円

青木理さんといえば「サンデーモーニング」での、的確な政治時評。いつも胸がすく思いで拝聴しています。1月24日の番組では、板書でコロナ対策のための感染症法や特措法改正案についての解説をしました。入院拒否したら罰則は必要か？と疑問を呈しました。医療崩壊が迫っているのに、罰則をつくれば、検査を拒否する人も増えるのではないかと。自粛警察とか、分断や差別や偏見を増やして、むしろ逆効果だと政府を批判しました。

スタジオジブリが発行している小冊子『熱風』に連載中の対談記事「日本人と戦後70年」からセレクトした9人が登場します。ちなみにこの連載は今もつづき、50回を超えています。

「根っからの『抵抗者』もいるにはいるけれど、しかしそれぞれの分野で一流のスペシャリストであり、本来であればそれぞれの分野の中心的人物として中枢を歩み続けていく—あるいは歩み続けてもおかしくなかった—ような方々が多数含まれている」(はじめに)より。

どの人も言うべきことを言う姿勢を貫き、少数派であることを怖れず、発言し続けてきた人たちです。破滅に突き進む日本を問う書です。

最初に登場したなかにし礼さんは作詞家であり、「長崎ぶらぶら節」で直木賞を受賞。「日本という国に



3回見捨てられた」と壮絶な引き上げ体験を作品やメディア、講演で語り続け、平和や反核への思いを訴え続けました。2020年12月に82歳で死去しました。独身の頃、とても好きだった歌が「石狩挽歌」でした。北海道のニシン漁がさびれた悲しさが込められていてよく歌いました。なかには「日本は今や戦前の状態」と警鐘を鳴らしています。

前川喜平さんとの話で 個人よりも国家が大事という方向に教育が舵を切りつつあることの危機。中村文則さんとの対談では社会や権力に文句を言ったり刃向かってでも無駄だという空気。これは文句を言うだけで自分は何も行動できない「罪悪感」が根底にあり考えるのを辞めてしまうのだという。官僚のイエスマン人事。オウム裁判と山口母子殺人事件からみる死刑制度の是非。かつてはなかったメディアトップと首相の会談…。それぞれ様々な観点で現在の憂いを語っています。

青木さんは時代に抗う人たちに敬意を持ち、彼らから、貴重な言葉を引き出しています。植村裁判を支える市民の会で、青木さんを札幌にお呼びし講演していただいたご縁があります。

私たちが知っていたことが、9人の方の発言からずしんと伝わってきました。是非、お読みください。お薦めです。

## 時代を切り開いたおかかたち

大コメ騒動

本木克英監督



1918年(大正7年)に富山県の漁師町で起こった「米騒動」事件を女性たちの視線で描いた作品です。

貧しいおかかたちは、米俵を背負い、船まで運んで日当は20銭。夫が出かせぎ

漁に出て3人の子育てしながら米俵を運ぶ重労働の日当で家計を支える松浦いと(井上真央)らは、第一次大戦の特需による米買い占めで米が買えなくなります。家族を守るために立ち上がったおかかたちの奮闘が描かれます。理不尽な社会に怒り行動する女たちの姿をとらえます。米を積み荷しようとしていた業者に対して、いとが「米を旅に出すなー!」と掛け声をあげ先陣を切り、それに続いておかかたちが砂浜を駆け抜けるシーンが圧巻! 映画ではその姿取材した記者は事実を丁寧に書いたのに、大阪の新聞社は「暴動」とセンセーショナルに報道し全国に波及します。

戦争景気に沸く人々がいる一方で格差拡大で苦しむ人々。当時はスペイン風邪が流行の兆しをみせていたころです。コロナ禍を生きる私たちとも重なります。

当時、刺激的な伝えられ方をして、当事者たちは長く口を閉ざしていたそうです。

大企業によるリコール隠しを描いた社会派ドラマ「空飛ぶタイヤ」の本木克英監督は富山県出身。20年前から映画にしたいと考えていたと語っています。「真摯に面白く、娯楽映画の形で、ばあちゃんたちの気持ちを富山弁で」作られました。富山弁は迫力満点。「女一揆」とも呼ばれ全国に波及して、当時の内閣を総辞職にまで追い詰めたのです。すごいですね。

勇気を奮い立たせて苦境を打破した名もなきおかか達からエネルギーをもらいました。

## 少年の成長を通してアイヌ民族のリアルな姿を描く



アイヌモシリ

福永壮志監督

アイヌの人々が本人役で出演して共同体

の内側から、今の暮らしを伝えます。監督は伊達出身。言葉もアイヌの会話そのもの。雄大な大自然は、14歳のカント(下倉幹人)を丸ごと包み込みます。成長には痛みも伴いますが、守り神のような動植物、亡き父、周囲の大人が彼に注ぐ視線は温かで、アイヌ文化を自然に受け入れていく様を瑞々しく演じました。

カントは、アイヌ民芸品店を営む母親のエミと北海道阿寒湖畔のアイヌコタンで暮らしていました。アイヌ文化に触れながら育ってきたカントでしたが一年前の父親の死をきっかけにアイヌの活動に参加しなくなります。アイヌ文化と距離を置く一方で、カントは友人達と始めたバンドの練習に没頭し、翌年の中学校卒業後は高校進学のため故郷を離れることを予定していました。

亡き父親の友人で、アイヌコタンの中心的存在であるデボは、カントを自給自足のキャンプに連れて行き、自然の中で育まれたアイヌの精神や文化について教えこもうとします。少しずつ理解を示すカントを見て喜ぶデボは、密かに育てていた子熊の世話をカントに任せるように。世話をするうちに子熊への愛着を深めていくカント。

デボは長年行われていない熊送りの儀式を準備していることを知って……。イオマンテ復活を議論する場面は、演技ではなく、アイヌの人々の考え方で進めたそうです。アイヌのありのままの姿を知るすてきな映画でした。

## 孤独な人々が本当の幸せと巡り合う



ニューヨーク 親切なロシア料理店

ロネ・シェルフイグ監督

冬のニューヨークでさ

まざまな問題を抱えている人々が巡り合い、助け合っていくさまを描いた群像劇。夫の暴力から逃れ、二人の息子とマンハッタンにやってきたクララは創業100年を超える老舗ロシア料理店に忍び込みます。弟の罪をかぶって服役して料理店のマネージャーとして雇われたマーク。看護師でありながら、「赦しの会」を主宰したり、ホームレス支援センターで、仕出しを手伝う変わり者の常連客アリスなどがレストランに集います。アリスは、不器用で職につけないジェフに支援センターで出会います。それぞれに、社会で生きにくさを抱えていました。オーナーのティモフェイも変わり者ですがさり気ない優しさがあるのです。バラバラのエピソードが、ロシア料理店に集約されていきます。

無一文のクララは洋品店で高級服を、レストランで料理を盗んで子どもに食べさせます。クララの長男

はそれを知っていて赦します。父の命令で、兄は弟を殴ったことを知っている弟は「僕がお兄ちゃんだったら同じことをしたよ」と赦す姿に愛しさがわきました。

警察官の夫が家族を探し当てたり、兄弟の弟がレストランを離れて寒さで倒れて病院に入院したりと、刻々と彼らに危険が迫ります。その時にさり気なく、助けてくれたのが、レストランで出会った人々でした。

## Cinema Graffiti

## 〈私の映画評〉

## シネマグラフィティ

ユダヤ人もドイツ人もフランス人も違いはない

差別を越えて、命を守る

『アーニャは、きっと来る』

樋口 みな子

札幌映画サー  
クル会報  
シネアスト20  
21年2月号掲  
載

原作者の英国児童文学界を代表するマイケル・モーパーゴは現地に行き、村人からクマ狩りの話や、戦争中にユダヤ人らが国境を越えてスペインに逃亡した実話やドイツ軍占領時代のエピソードを聞いて着想を得たそうです。ベン・クックソンが脚本・監督です。モーパーゴの「戦火の馬」がスピルバーグによって映画化されています。私は馬好きなので、こちらも是非観たいです。

フランスとスペインの国境ピレネー山脈の大自然にいきなり引き込まれました。10月に道南の北斗市にある当別丸山に登りました。その登山口がトラピスト修道院で、ピレネー山脈にあるルルドの洞くつを模したものがつくられ、聖母マリア像が安置されていました。ここからは厳しい登りが続くのですが、私はそっとマリア像に「コロナから私たちを守ってください」と祈っていました。

ピレネー山脈の麓にある小さな村、レスカンに住む13歳のジョー（ノア・シュナッブ）は羊飼いです。山の中で



ナチの迫害から逃れてきたユダヤ人のベンジャミンと出会います。彼は列車で収容所へ送られる寸前に逃亡し、娘アーニャを手放してしまい、義母の家で再会を待っています。しかし、平和な村にも戦争の影が忍び寄ってきます。

村がナチスに占領される中、ジョーは家族や友人、村の大人たちや出会ったユダヤ人や、ドイツ軍伍長らと親しくなり、それぞれの境遇や人生を知ります。ジョーの成長物語でもあります。

ベンジャミンはナチスから逃れてきた子どもたちをス

どの人生も崩壊しそうな人たちばかりです。でもコミカルな演出でラブロマンスも描かれます。

コロナ禍で社会のひずみが露わになりました。誰かにとってぬくもりのある場所は、「きっとあるよ」と背中を押してくれました。行ったことはないけれど、ニューヨークの片隅のロシア料理店が大好きになりました。

ペインに逃がそうとしていましたが、ドイツ軍が村に進駐します。ジョーは匿われている子どもたちの食料調達役を引き受けるのです。ナチスによる巡回が厳しくなる中で知り合ったホフマン伍長は、ベルリンの空爆で娘を失う悲しみを抱えていました。人間的に温かく、ジョーを山に誘い、鷹の飛翔を楽しみます。ジョーの祖父アンリ（ジャン・レノ）は、ブランデーの貯蔵庫を子どもたちの隠れ家として提供するのです。

戦地から帰ってきた父親とのやり取りなどを挟みながら、村の人を巻き込んだ極秘計画がいよいよ実行されます。ユダヤ人の子どもたちを羊飼いとて仕立て上げ、国境近くの山小屋まで移動させるという計画を発案したのは、ジョーの母でした。村人たちに紛れさせて高地の牧草地へ連れて行くシーンが壮観。雄大なピレネー山脈の夜明けが美しい。武装したドイツ兵らに監視され、命を脅かされる人々と共に犬や羊の群れが山に登っていくシーンは、ハラハラしながらもダイナミックで、最大の山場です。

ここで描かれるのは、ユダヤ人もドイツ人もフランス人も優劣などない。命は平等だということです。ジョーの周りの大人たちがとても素敵です。ベンジャミンが選んだ道に涙を禁じえませんでした。

この映画を観ながら、6年前にアウシュヴィッツ博物館やビルケナウ収容所を訪ねた日を思い出していました。『シンドラーのリスト』で有名なクラクフのシンドラーの工場（現在は歴史博物館）に行き感動したのは、入り口に彼に救われた工場労働者1100人の写真が飾られていたことでした。シンドラーはユダヤ人を雇用して命を守ったのです。当時リトアニア領事館の杉原千畝さんはポーランドや欧州各地から逃れてきたユダヤ人に大量のビザを発給しました。その数6000人。密告で命を失う人もいた中で、良心に従った行為は忘れてはならないと思います。

プラハのテレジン収容所にも行ってきました。そこには4000枚の絵と、30篇の詩が残されていました。ゲットーには音楽や美術の教師、医師らが命をかけて「人間らしく生きる」ことの大切さを伝えたのです。最初の頃の絵は暗く、未来のない絶望が描かれ胸に迫りました。教師らは子どもたちに抵抗や生き残る望みも与える献身的な努力を重ねたそうです。人種差別の犠牲になった子どもたちに「二度とこんなことはしませんから」と心に誓いました。

でも、世界はあの戦争から学んだのでしょうか？ コロナ禍で警察官による黒人射殺事件が起き「Black



Lives Matter (黒人の命も大切だ)」という抗議活動が始まりました。日本では医療従事者の家族に「コロナは来るな」とか保育園児の拒否問題なども起きています。在日韓国人への差別や、ベトナムなどからの工場実習生への低賃金、過重労働が問題になっています。世界中でヘイトクライムが広がっています。過去のことではない。ジョーの生き方は、私たちに何をすべきかを教えています。子どもにとって大事なものは大人たちの豊かな関わりだと気づかされました。

馬と荷車、鷺の鳴き声、滝や川の音を巧みに取り入

## 静謐で濃密な愛の物語

### 燃ゆる女の肖像

### セリーヌ・シアマ監督



18世紀、望まぬ結婚を控える貴族のエロイズ(アデル・エネル)と彼女の肖像を描く女性画家マリアンヌ(ノエミ・メルラン)。生涯忘れぬ痛みと喜びを人生に刻んだ恋を辿る追憶のラブストーリー。

エロイズは肖像画の描き直しを要求し、今度は自分がモデルになると申し出ます。椅子に腰掛け、画家の前にやってきたエロイズは、自分を見つめるマリアンヌを、まっすぐに見つめ返す。美しい島をともに散策し、音楽や文学について語り合ううちに、激しい恋に落ちていく。二人の心臓が焼けつくように高鳴ります。自分の内に欠けているものと出会っていくのです。絵を描くだけではない、ただ視線で暴きあった生身の人間としてのコミュニケーションが、そこにはふんだんに描かれています。

祭りに集う女たちによるケルト民謡のような清廉な歌声が響くなか、焚き火ごしにマリアンヌがエロイズを見つめる幻想的なシーンが印象に残りました。

シンプルでありながら豊かな余韻をもたらしてくれました。ラストの深さになかなか席を立てなかったです。セリーヌ・シアマ監督の表現力に圧倒されました。さすがフランス映画ですね。

### リアルなアメリカ社会が伝わってくる

### 行き止まりの世界に生まれて



### ビン・リユー監督

ラストベルトと言われるロックフォードの街に生まれ育った3人の少年の12年間追ったドキュメンタリー。

何といってもスケボーシーンの映像がいいです。誰もいない街を疾走し、空を飛んでいくシーンが爽快です。監督になったビンはキアーやザックの正直な本音を聞き出しています。親友でありながら、ザックはなかなか親から受けてきた暴力を語れずにいたこと。さらに若い妻にも暴力をふるっていたことを知り、ビン自身も継父から受けていた暴力を初めて母親に話します。胸が締め付けられました。母はそれを知って泣いて謝るのです。

ビンは「家庭内の暴力の連鎖」というテーマに踏み

れています。村をひとつにする教会の鐘。移牧の時の羊飼いが使う鈴は代々受け継がれてきた物を使ったというのですから、リアリティがありますね。

ノア・シュナップの瑞々しい感性、大人たちを演じたジャン・レノ、フレデリック・シュミット、トーマス・クレッチマン、アンジェリカ・ヒューストンらも温かく味がありました。

(C) Goldfinch Family Films Limited 2019

込んだことで、自分自身や母親にもカメラを向ける決意をしたと語っています。

3人がそれぞれに苦しみながら必死に生きていく姿に胸がいっぱいになり、涙があふれました。ビン監督の映像も編集も素晴らしい。でも悲壮感はなく希望がみちていました。

印象に残ったのが、「もう一度生まれ変わっても黒人でいてほしい」というキアーの父親の言葉です。勇気づけられました。生きずらさを感じている人たちにお勧めです。昨年10月に観ました。



エスぺランチスト堀泰雄さんの絵手紙

### 読者の寄稿をお待ちしています

コロナが発生してから1年。収束にはまだ時間がかかるようです。お勧めの本や身近な自然など1000字以内で読者のみなさまからの寄稿をお待ちしています。

購読料と寄付をありがとうございます  
(敬称略) 2020. 12. 15 ~ 2021. 1. 20

室田トモ子 三島春光 川原茂雄 安田成男 鈴木 訓 今美千代 小松知己 志田郁夫 川原勝利 尾寄弘子 山口力三 伊藤誠一 三浦恵美子 藤田トシ子 伊藤牧子 澤 耕司 和田マサコ 吉田雅子 富盛保枝 松浦幸子 田村陽子 水野スウ(切手) 高橋春枝 阿保 亘 土本武司 梅沢俊・節子(著書) 吉根由起子 金尾誠一 相馬述之 喜多義憲 太田朋子 中佐藤真理 堀 泰雄 吉田真由美・赤石としあき 中島圭子 高橋 儒 戸谷真知子 河原麻代 内田篤禱 堀 和恵(著書) 藤谷和廣 藤島美佐子 合計121,500円は印刷代と送料に使わせていただきます。(2021年度分で頂きました。)

恐縮ですが2021年から購読料を2000円に値上げしました。Webに切り替える方はお知らせください。

郵便振替「銀河通信」02740-7-56535 にお問い合わせします。